令和８年度 第２回 会津若松市中小企業・小規模企業未来会議 要旨

日時：令和８年９月15日（火）９：30～11：30
場所：会津若松市役所本庁舎 ５－３会議室

１ 開会

２ 協議

会津大学短期大学部 木谷准教授を座長として進行する。

⑴ 情報共有

① 今年の米価と今後の地域経済への影響について

・ 新聞等で報道されている通り、昨年は米価が高く、備蓄米を放出したが、今年は状況が一転している。JA 会津よつば管内では、「コシヒカリ」の価格が、60 キロあたり、昨年が２万 9,100 円のところ、今年は約半分の１万 5,100 円まで下落し、“天のつぶ”は、昨年が２万 7,000 円のところ、今年は１万 2,000 円と大きく値下がり、生産者にとっては厳しい状況になる。国が試算した今年の生産コスト指標よりも、5,000 円から 6,000 円ほど販売価格が安いため、農家は赤字を強いられる。

・ 現在、政府が備蓄米の買い戻しを進めており、今年は既に４回実施され、全体で 100 万トンのうち、50 万トンが買い戻された。しかし、このまま推移すれば、来年６月末には、在庫が 300 万トンに達し、通常の適性在庫である 200 万トンから 180 マントンを大きく上回る。そのため、来年も引き続き、米価は低迷すると考えられるので、会津地域の経済への影響も大きくなると予想される。

⑵ 意見交換

初めに、事務局より、前回会議の振り返りを行い、その後、２グループに分かれ協議後、発表を行った。

協議内容は、前回までにより多くの意見が出ていた「意識改革」について焦点を当て、市の中小企業・小規模企業の「ありたい姿（理想の姿）」と「現状」の間に生じている「ギャップ」について、課題を具体化・明確化するための協議を進めた。

また、グループ協議の前に、威徳院 松村氏により、自身の経験から「意識改革」に関する問題提起として、以下テーマの発表をしていただいた。

◎ テーマ

「会津の「ある」を磨く時代へ
～ないものねだりからあるもの磨きへ～」

（発表の内容は p11 に掲載）



令和７年度までの意見（中小企業・小規模企業に関する「意識改革」を抜粋）

ありたい姿

～ 企業が挑戦と成長を続け、誰もが豊かな暮らしを実感できるまち ～

◇ 企業が元気で稼げる環境と創業など挑戦し続けられる環境。

◇ 経営者と従業員が幸せや豊かな暮らしを実感し、地域の規模に合った持続可能な経済循環の実現。

現状

～ 挑戦や変革への意欲が低く、人材・資本力の不足や保守的な姿勢 ～

◇ 諦めや閉塞感があり、挑戦する人が少ない。

◇ 経営者が変わろうとせず、変わることへの抵抗感がある。

ギャップ

ありたい姿と現状の間に生じている問題（ギャップ）

（令和7年度までの協議で出た3つのギャップ）

① 働くことの意識が欠如	経営者と従業員の間で働く意義や意識（ビジョン・目的）が深く共有されれば、小規模な企業でも大きな成長につながる。
② まだ男性中心の社会	女性の職業を決めつける固定観念が、女性の雇用機会の不足や女性の地域外流出を招いている。
③ 意識改革不足 経営者の意識が変わろうとしない	経営者の意識を変え、時代遅れの経営から脱却し、仕事の量ではなく、仕事の価値を高めることを目指す必要がある。 それが働きがいや、売上、給料アップにつながる。

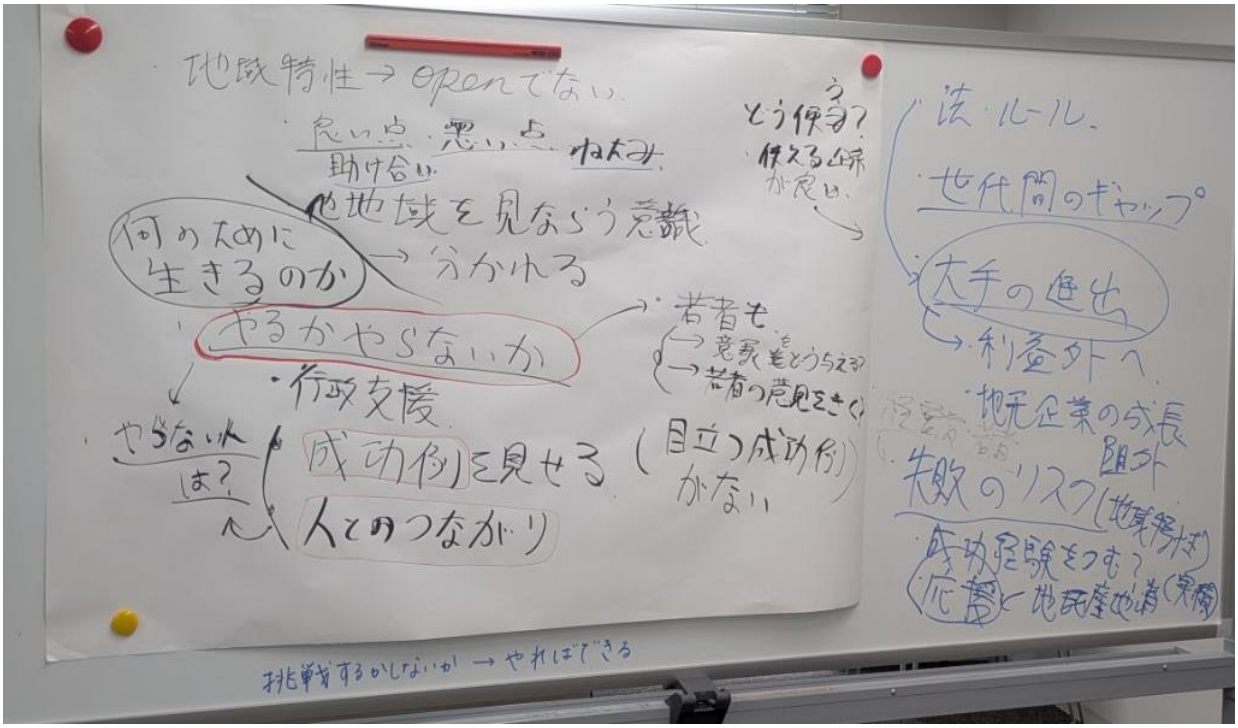




（ 令和8年第2回 未来会議の協議の様子）

Aグループの意見

メンバー　会津大学短期大学部　木谷　准教授
古川プラスチック　代表　古川氏
天糸瓜ネット合同会社　代表社員　馬場氏
福島県中小企業団体中央会会津事務所　主任主査　遠藤氏
会津信用金庫　営業推進部 お客様支援課課長　真渡氏



1　令和７年度に出た３つのギャップの深掘りと、新たに追加するギャップについて

①　働くことの意識が欠如

・　経営者と従業員との間に認識のズレが生じる背景として、若い世代は待遇や給与を見て、職を選んでいる傾向がある。20～30 年前の市場とは逆の立場になっているため、こうした状況（働く意識の欠如）が生じるのは当然のことである。現状は、学生側が企業を選び放題の状況。

・　机上で考えられた労働に関する法律やルールが様々出てきて、若い世代がその法律を忠実に守ろうとするため、雇用主側も従来の慣習と新しい法律とのギャップで戸惑う場面もある。（ハラスメント防止法など）

②　男性中心の社会

・ AI の進展により、無くなりそうな仕事だと分かっていても「経理の仕事がしたい」という若い世代（女性）もいる。女性の仕事だというイメージがあるようだ。

（AI に関するメンバーのコメント）

・ 昔は分からないことは人に訊いていたが、今の若い世代は ChatGPT などの AI に相談することが増えている。アナログの時代を生きてきた世代は、AI の情報が本当に正しいかどうか判断できるが、超デジタル世代は、AI の答えをそのまま正しいと信じてしまいがちな傾向がある。そのため、世代によって情報との向き合い方や扱い方にギャップが生じている。

③　経営者の意識が変わろうとしない

・ 会津地域の経営者の意識として、「挑戦をしない」「失敗のリスクを極度に恐れる」という傾向が特にある。

（リスクに関するメンバーのコメント）

・ 世の中は、思い通りに成功するのは 2 割程度で、8 割は達成できないもの。やってみなければ結果は出ないので、まずはリスクを取って挑戦するという行動（意識）が必要。
・ 上場企業はリスクを最小限にしており（人口密度に対して売上が何%になるかなど）、達成しなければ、すぐに撤退してしまう。そのため、大手企業に頼るのではなく、地元の伝統工芸や観光を応援してもらえるような取り決め（応援割など）をして、地域全体で戦う仕組みが必要なのではないか。
・ 今の若い世代は、自分でリスクを取って成功した経験が乏しく、YouTube などで他人の成功を疑似体験しているだけではないか。小さい時に、些細なことでもリスクを取り、上手くいった経験がないのではないか。

④ リスクを取らない（地域性）　※追加

・ 会津の風土として、周りを山に囲まれた盆地であり、地理的にも外部が入りにくい。また、昔から良くも悪くも「無尽制度（助け合い）」があったが、誰かが抜け出して成功しようとすると「助けてあげたのに」と脚を引っ張ったり、妬んだりする側面もあるのではないか。
・ 県中・県南や他地域の発展に対して「なぜあそこばかり」と嫉妬するのではなく、「自分たちも見習おう」と意識を変えていくことが全てにおいて大切。

⑤ 外部の大手企業の進出　※追加

・ 労働市場のレベルや戦う土俵が全く異なり、また地元企業のシェアを確実に奪っている。利益の大部分が外部の株主や市外の本社へ流出してしまう点も問題である。

⑥ 地産地消が進んでいない ※追加

- 会津の基幹産業は観光であり、農業や製造業も観光と深く繋がっている。地域内でお金を回すためには、地元の商品を市民が応援し、購入することが必要。
- お土産店でも、売上優先で海外製品を置くのではなく、少し高くても地元の商品を積極的に扱う販売マネジメントをしなければ、地産地消は進まない。
- コンビニでも、オーナーと交渉し、地元の伝統食品や工芸品を店内に置いてもらうことができる。大手チェーンの枠組みを上手く活用し、地元の良いものを発信・販売していく工夫が必要である。

2 全体のキーワードは「やるかやらないか」と「人とのつながり」

（経営者に関する視点）

- やる人（商売）を増やすには、その人のモチベーションを上げる必要がある。また、個人事業主など、小規模事業者が作りたいもの、やりたいことを見つけたときに、行政や商工会議所、中小企業庁などに売る場所を相談し、自ら販路を見つけていく必要がある。（情報の活用）
- “やらない人”を”やる人“に変えるには、成功事例やモデルケースを見せるなど、モチベーションを上げる取組をすると良いのではないか。会津には極端な成功者がいない。または表に出てこないのかもしれない。（地域性）
- 自分と異なる考えを持つ人と積極的に関わることが大切である。自分よりも多様な視点や豊富な知識を持つ人と付き合うことで、自然と新しい情報が得られ、ひらめきや発想も生まれる。
- 「人とのつながり」によって、商売が上手くいったり、リスクを減らす知恵を得ることができる。AI に頼らず、そういった実体験を重ねる流れを作れば、まちは消滅しないだろう。資源はあるので、それらを上手く活用していくことが必要である。
- 会津の観光資源は他の地域にはないもので、恵まれているはず。それを生かせるかどうか。

（若い世代に関する視点）

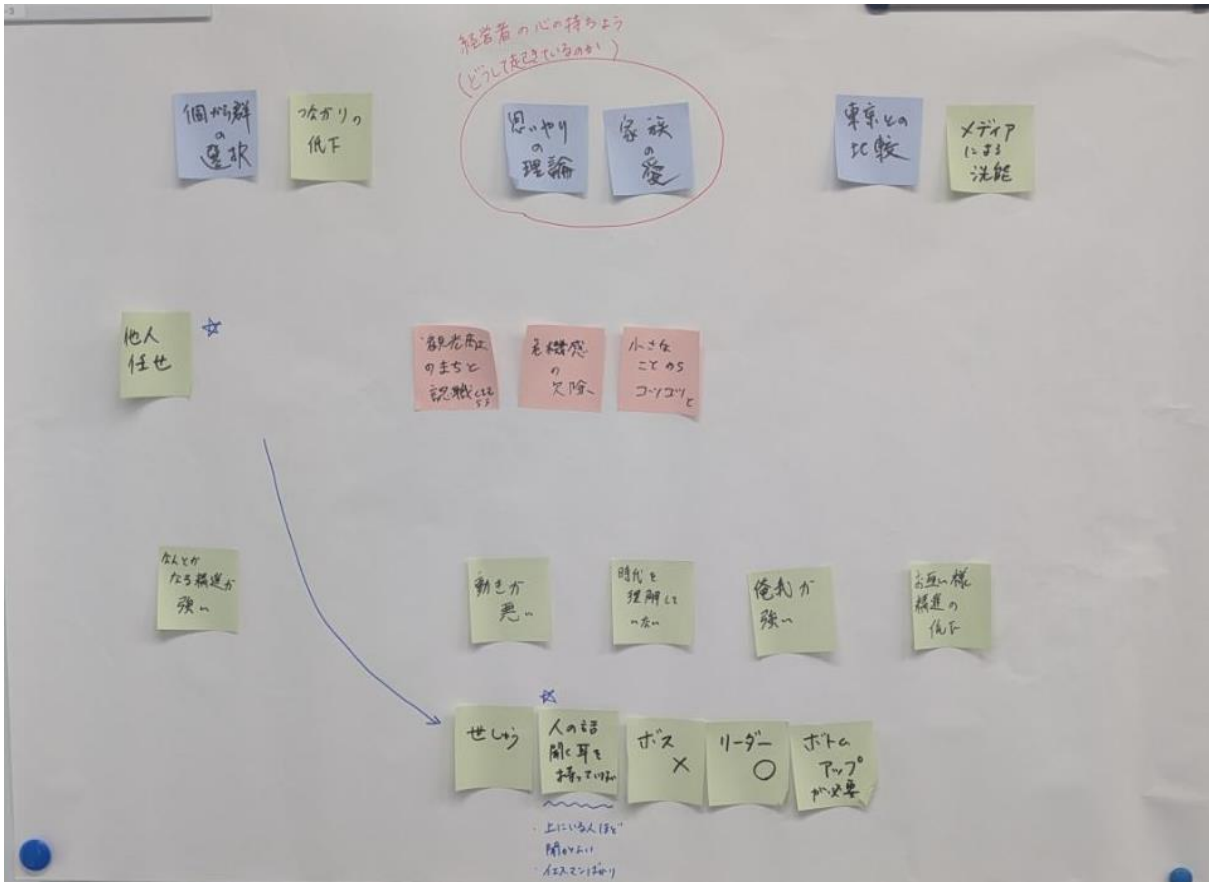
- 今の若い世代は、「小欲知足」（欲望を抑え、今あるもので満足すること）が過ぎるのではないか。小さい頃から満ち足りていて、これ以上の暮らしを求めていない。そのような価値観を持つ若い世代に、“成功のために働く”といっても、あまり響かないだろう。そのような人たちに、「人とのつながり」の中で、気づきを得てもらうまで引っ張れるかが課題。
- お金のために働くかというと、そうではなく、使命感や社会的意義のあることをしたい人も多い。世の中を変えたいという意欲を持つ若い世代もいて、２極化している印象。意欲のある学生の本音を直接聞き出す場が必要なのかもしれない。高校生や学生を未来会議に招き、なぜ地元を出ていくのか、どうすれば戻ってくるのかを具体的にヒアリン

グし、分析するのもよいのではないか。

- “若い世代“という大きい枠組みではなく、県外就職希望者など、属性を絞って意見を聞くということは今までやっていないと思うので、対象を絞って聞く取組も良いのではないか。
- 「なぜ頑張るのか」という理由は、世代によって異なるが、理想や理念、誰かの役に立ちたいという気持ちは共通して持っているはず。そうした部分を共感できなければ、一緒に働くことは難しい。共通点が見つかれば、コミュニケーションも生まれ、良い関係も築くことができる。
- 会津を出てしまう若い世代に、将来戻ってきたいと思える何かを植え付けたい。会津の良さを伝えずに会津を出てしまうと、もう戻ってこない。どうすればその良さを伝えられるかが課題である。

Ｂグループの意見

メンバー　真言宗豊山派威徳院　副住職 松村氏
会津商工会議所　経営サービス部企業開発課　経営指導員　田尻氏
あいづ商工会　事務局長　白川氏
市観光商工部商工課長　卯月氏



１　令和７年度に出た３つのギャップの深掘りと、新たに追加するギャップについて

①　男性中心の社会

・　会津だけでなく、政治の世界もそうだが、日本はまだ男性社会なので、そこを変えていく必要がある。女性がもっと活躍できる社会がとても大事だと思う。始めるという字も女偏なので、物事の出発点には女性の力が欠かせない。

②　個から群の選択　※追加

・　地球上には 800 万種もの生物がいるが、人間は他の生き物に比べて子育てする期間が

抜群に長いため、群（集団）で生活することを選択した。働く上でも、一人では仕事は成り立たず、皆で協力したり、意見を聞いたりと、お互いに協働することが社会の基盤になっている。つまり、集団で生きる上で、他人と協力することが重要であり、またそれぞれの“個の動き”（行動や役割）が社会全体のカギになっているのではないか。

③ 家族の愛 ※追加

- 根本的に大切なことは、「家族の愛」。家族は最も小さな社会であり、家族のかたちは様々だが、愛情を知らず育った子どもは、愛や優しさが培われていないので、社会の中で問題を起こしやすい。（思いやりの低下）
- 愛は見返りを求めず、無償で与えられるものであり、そうした豊かな家庭環境が子の教育にとって大切である。

④ 思いやりの理論 ※追加

- 言葉だけで「頑張れ」「大丈夫」と励ますだけでなく、心から相手を思いやるためには、身近なところから実際に行動することが必要である。例えば、災害などの緊急時には、命がけで助ける覚悟がなければ、表面的な優しさにすぎない。そうした“本物の思いやり”が培われれば、物事がうまく進むのではないか。様々な人（個）が社会にいるので、“個”がこの世の中でどう生きていくかが、大きな試練でもあり、体験でもあり、成長に繋がると思う。

⑤ 観光・商工のまちと認識する ※追加

- 職業柄かもしれないが、周囲には意識の高い人が多く、決して意識の低い人だけではないという印象。市民や意識の低い事業所にも、会津若松が観光や商工業で、もっと稼げるまちであるという前向きな認識を持ってもらう必要がある。

⑥ 危機感の欠如・小さなことからコツコツと ※追加

- 今のままでは、まちの将来が危うくなるという危機感の意識を持つべき。
- 大企業の誘致といった特効薬に頼るのではなく、目の前の小さなこと（事業）をコツコツと一生懸命に頑張るということが基本。事業所であれば、売上を伸ばすとか、雇用を増やすなどが大切。

⑦ 他人任せ ※追加

- “自分がやる”より、“誰かがやる”という意識が多い気がする。

⑧ なんとかなる精神が強い ※追加

- 今の時代はデータでものを言われる時代。「なんとかなるでしょ」と言って、目の前のことから目を背けているのではないか。

⑨ 動きが悪い ※追加

・ 例えば、県立病院跡地の計画なども様々なしがらみがあるのか、動きが遅い。行政だけでなく、市民の動き（理解）が遅いことも原因ではないか。

⑩ つながりの低下 ※追加

・ 昔は３世代の同居が当たり前だったが、今の日本社会においてはそれが難しくなっている。また、市でも様々なマルシェなど、イベントを企画しているが、そのような“人とのつながり”がないと良くならない。会議でも、世代を超えて話し合うことで新しい考え方が生まれ、つながりが広がっていくことがある。

⑪ 我が強い ※追加

・ 会津の人は控えめな一面もある一方、自己主張が強すぎる人もおり、逆に周囲が遠慮してしまうことがある。
⇒「動きが悪い」に繋がる。

⑫ お互い様精神の低下 ※追加

・ 我が強いと同じく、「俺はこう考えている」と強く出てしまうと、若い人が離れてしまう。
⇒「つながりの低下」に繋がる。

⑬ 時代を理解していない ※追加

・ 若い人でも、うちの会社は昔からこうだからといって変わろうとせず、時代を理解していない。（世襲に多い）
・ 人が変わったのではなく、時代が変わっているという認識をいかに持てるか。

⑭ 東京との比較 ※追加

・ 今の若い世代は、会津に残ることがカッコよくないと考える人も多い。仕事の内容よりも、東京の華やかな場所で暮らすことが魅力的と思う人が多いようだ。（特に女性）
・ 人口減少の中で、地元に企業が少ないことも一因かもしれないが、会津の良さや価値観がダサいと思われてしまう現状を変えていく必要がある。
・ 会津に若い世代が残らない理由を一つ一つ解消していかないと、同じ状況が続いてしまうのではないか。
・ 東京もドーナツ化現象が進んでいる。東京には通勤するだけで、実際に住むのは物価や土地の安い埼玉や千葉などの郊外を選ぶ人が多い。特に結婚して子どもができると、現実的な理由から郊外に移り住む傾向がある。大学進学で東京に出てしまうと、そのまま関東圏に残ってしまい、地元には戻ってこないので、どうすれば会津に戻ってきてもらえるかを考える必要がある。

２ 全体のキーワードは「他人任せ」

協議の結果、一番影響が大きいギャップは“自分がやる”よりも“誰かがやる”という**「他人任せ」の意識**という意見で一致した。

◎　次回の協議について

今回２グループで出た意見を事務局でまとめ、次回の会議にて「特に影響があるギャップ（問題）」から問題解決のために「会津若松市のこれから取り組むべき課題」と「未来会議のこれからの取組」について協議を進める。

４ その他

５ 閉会

威徳院　副住職 松村氏による「意識改革」に関する発表

◎ テーマ 『 会津の「ある」を磨く時代へ～ないものねだりからあるもの磨きへ～ 』



自身の経験から「意識改革」に関する問題提起として、以下内容の発表をしていただいた。

（抜粋）

- 会津の未来を切り拓くには、ないものねだりではなく、“今ある魅力”に価値を見出すことが大切である。そして、その“今ある魅力”に気づくには“ネガティブ思考からポジティブ思考への転換”と“意識改革”が必要不可欠。
- 意識改革は、シニア世代だけでなく、“若者世代の意識改革”も極めて重要。会津の未来を切り拓くためには、世代を問わず、会津に対するネガティブな思い込みを捨て、会津の魅力に気づき、自らが持つ武器（魅力）を生かしていく。（会津地域で考えると、観光・農業・伝統産業などが魅力として挙げられる。）
- 「小欲知足」という仏教言葉があり、意味は、「欲望を抑え、今あるもので満足する」というもの。人は自分に足りないものを求めるが、たとえそれを手に入れても、満足することはなく、また次のものを求め続けてしまうものである。

  作曲家の秋元康氏の言葉で、「幸せは冷蔵庫の残り物で作る料理にある」というものがある。冷蔵庫に世界中の食材を揃えても作れない料理があっても、今ある残り物や、別な食材で代用して何が作れるかを考えることが“幸せ”という意味である。

  会津においても、自分にないものを求めるのではなく、今あるものに目を向けて、その中で幸せを見出す“意識改革”が重要ではないか。